

CONTENTS

- ◆越戸の中州に思う環境復元論
- ◆明治用水ダムの魚道を利用する魚たち
- ◆消えゆくもの
- ◆今月の一枚
- ◆今月の調査風景
- ◆2004矢作川「川会議」開催

URL <http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/>

越戸の中州に思う環境復元論

田中 蕃

最近、矢作川の越戸の中州（対岸が古巣水辺公園）先端で、あわよくば自然の力で中州を撤去するための、一寸した仕掛けが施された。川のことは川に任せるとの思想を、半ば応用した越戸の中州撤去計画である。工法は称して「ハイドロバリア水制」。高水が出て、水制の間を勢いよく水が流れる力を利用するという。上手くいくかどうかは、結果を見なければ分からない。それも自然任せである。私はこの試みに環境復元を期待してはいない。



越戸の中州先端に施工されたハイドロバリア水制

矢作川漁協100年史「環境漁協宣言」のp.268-271に4枚の航空写真を載せたが、私は愕然とした気持ちを抑えながら執筆した。今の中州のこんもりした植生は、過去経験したことのない環境である。1980年頃の中州、激しい日照りの砂州に咲く可憐なカワラナデシコはもう何処にもない。砂州になれば…と思うが、望み薄である。環境復元の語呂はよいが、復元目標の原風景は誰も描けていないのではないかと。原風景は人の生きた時代によって様々に変化する。炭焼き時代を知る人はその頃をとらえるが、それ以降に育った人にはとらえようがない。ある意味では、目標を厳密には設定できないし、そのうちに復元論が瓦解するか、多方向化して收拾がつかなくなるおそれがある。

私は関西に住んでいた中学生時代から蝶に親しみつつ、54年もの間自然との関わりを持ってきた。往時は交通も不便で、経済的にも遠くに行く機会に恵まれなかったが、近郊の野山で豊かな自然を満喫できた。ふと思う。そのころ私のフィールドは、見た目にどんな印象だったのだろうか。戦後の焼け野原から再出発したから、今は住宅の建ち並ぶ街にも、家は疎らで、焼け跡には家庭菜園が広がっていた。山は燃料補給のために木が切られ、また牛馬飼料の採草も行われていたから、禿げ山とは言わないまでも、人が縦横に山地に入る余地のある植生であったように記憶している。それでも蝶はたくさん生息していた。見た目には貧相だが、中身は豊かだった。それが往時の自然だったのである。

川はもちろん、河川敷の蝶ギンイチモンジセセリ・シルビアジミの生息地だった。ススキ（前者の食草）が茂り、マツヨイグサやヨモギ類が川辺に草いきれを漂わせた、草刈り後には背の低いミヤコグサ（後者の食草）が黄色い花の絨毯を敷き詰めていた。矢作川にもこの2種の蝶は生息したが、遠い過去の記録になってしまった。堤防や河川敷の植生が、すっかり変わってしまった。ミヤコグサは矢作川の河口まで、堤防の内外をくまなく探してみたが、見つからない。絶滅種である。もう過去には戻らないのではないかと。

豊田市在住歴がまだ32年しかない私が、この中州のことに触れるのは、わずかな間に起こった自然環境の変化が、あまりにも激しく、かつ不可逆であることを実感しているからである。

（たなか ばん、豊田市矢作川研究所研究顧問）

明治用水ダムの魚道を利用する魚たち

新見克也

溪流魚アマゴの一部が秋に海へ降り、翌春、大きく成長して再び母川に戻ってきたものをサツキマスと呼ぶ。長良川河口堰が建設されたとき反対運動のシンボルとして扱われたので、ご存じの人も多いだろう。

平成10年度から14年度にかけて矢作川の下流域で、このサツキマスの標識放流が行われていた。海と山（溪流）を大回遊する大型魚を矢作川に復活させようという、豊田市農林課のロマン事業だ。放流した標識魚が戻ってくるかどうかを確認する遡上調査は私たち矢作川天然アユ調査会が担当し、毎年4月中旬～7月上旬ごろに明治用水ダムの左岸魚道へ定置網を設置していた。

細かいことはさておき、結果をいうと、標識サツキマスは5年間で1尾しか遡上しなかった。放流事業は失敗である。しかし、この遡上調査のおかげで、明治用水ダムの魚道がどのような魚に利用されているかという謎の一端が分かってきた。5年間の調査データをまとめてみると、表のとおり合計13種580尾の魚と82匹のモクスガニが捕獲されている。矢作川に毎年サツキマス（標識放流魚ではない）が遡上していることが明らかになったのも、この遡上調査の成果だ。



定置網に入った全長42.0 cmのサツキマス

明治用水ダム左岸魚道における5年間の捕獲魚種

魚種	尾	魚種	尾
① ニゴイ	255	⑧ オオクチバス	7
② ナマズ	80	⑨ カマツカ	4
③ フナ属	67	⑩ ニジマス	3
④ ウグイ	64	⑪ ウナギ	2
⑤ サツキマス	36	⑫ ヒガイ属	2
⑥ ブルーギル	36	⑬ タイワンドジョウ属	1
⑦ コイ	23	モクスガニ	82

調査の担当者として魚道へ通っているうちに私は、あらためて魚道の必要性を実感し、もっと詳しく魚道の利用状況を知りたいと思うようになってきた。今回の調査で使用した定置網は稚アユの遡上を妨げないよう網目を大きく作ってあるので、小型魚の魚道利用状況については何も分かっていない。ただ、これまでの魚釣り遊びや魚類相調査の経験から、明治用水ダムより上流には三河湾から遡上してくる回遊魚が極端に少ないことは間違いない。遊泳力の強い稚アユや大型魚は簡単に越えられても、ハゼの仲間やテナガエビ等の小さくて遊泳力が弱い回遊魚にとっては利用しにくい魚道なのではないだろうか。

明治用水ダムには遠くない将来に建て替えの予定があると聞いている。その時にこそ、遊泳力の弱い回遊魚にも利用しやすい魚道を造ってもらわなくてはならない。今のうちから現行魚道の利用状況を調べはじめておくべきだろう。

(にいみ かつや、矢作川天然アユ調査会)



明治用水ダム左岸魚道に設置した定置網

中田良政

背景写真：樹木神社の林

この原稿を書いている今、周辺では桜が満開を迎えている。この季節は桜の花を見て心をウキウキさせている。

さて、右の写真を見ていただきたい。竹に囲まれてしまい枯れた桜の木である。これがあるのは、豊田市美術館に近い樹木町にある林である。他にこの林には20本近くの桜の木があったが、多くは枯れたり、瀕死の状態となってしまった。

ここでは桜のことを言いたいのではない。知らぬ間に消えてしまった生き物を、後で悔やんでいる住民の話を書こうと思う。

この地区は、10年ほど前まで現在の童子山小学校の辺りにはまだ蜚が居たとその人は言う。居なくなった原因を少し推理するため、この10年ほどの変化を挙げてみる。まずは豊田市民文化会館南の豊田安城線の道路の開通、童子山小学校の移転、大型店の開店である。さらに枝下用水の高岡地区と南部への分岐点はコンクリート3面張りに改修され、冬季には枝下用水の水が全く流れなくなった。これらの中で蜚が居なくなった最も大きな原因は改修により枝下用水に土がなくなったこと、冬季の水切りにより枝下用水が乾燥してしまうことではないかと考えられ

るが、如何なものでしょうか。専門家の意見を聞きたいものである。昨今あちこちで消えてしまった蜚を復元しようと努力しているが、居なくなる前に打つ手はないものであろうか。

もう一点居なくなったものは、小川の鮒などの小魚類である。その蜚のいた辺りに長田川という小川が流れている。この川の水源は以前は樹木神社の林や神龍寺の林であったが、今は枝下用水に頼っている。ところが、前出のように冬は枝下用水から全く水は供給されない。有るのはコンクリートの繋ぎ目から滲み出る水と家庭廃水である。当然冬はどぶ川となってしまふ。これでは、魚は住み辛い。もしかすると蜚の幼虫もこの川に居たのかもしれない。

多くの人は大きな川の魚の減少や汚れを問題視するが、小さな川に魚が住めないことや、汚れにもっと目を向けて頂きたいものである。小さな川が行き着く先は大きな川なのだから。もっと言うならば、田んぼの水を切らないことと、田んぼの横を流れる溝と言っても良い程の細流とそこから続く小川の見直しを是非していただきたい。ここは小魚などの生まれ育つ大切なものではないだろうか？

この時期になると私は高知の宇佐の横浪三里という湾にスズキを釣りにいく。スズキのいるところは、湾に注ぎ込む小さな川のある所が良いポイントなのだ。理由は簡単である。その小川では春先に大量の鮒が孵化しているのである。

話を樹木の林に戻そう。多くの桜があっ

竹林に囲まれ、朽ち果てていく桜



た林では公園造成計画が進もうとしている。この林を生かした公園となるのか、それとも違った形の公園になるのかそれは一部の人にしか分からない。それとこの林には貴重な自生の木がある。それは幹の太さが1cmもないヒョロヒョロとした木である。時々見に入り無事を確認してホッとしているのである。誰か守ってくれないものだろうか。誰かに問いかけるだけで行動に繋がらない自分に苛立ちを覚えている今日この頃である。公園計画が、桜の再生と健全な林を生かしたものになってもらいたいと願いここでキーをたたくのをやめる。

(なかた よしまさ、

七州城城下町まちづくり協議会)

※一重のくちなしの苗(挿し木したもの)を15本差し上げます。ご希望の方は矢作川研究所にご一報を。



道先案内人ハンミョウ
(2004年4月11日 間野隆裕 撮影)

今月の一枚

今月の 調査風景

3月18日（木）

矢作川中流域のカワシオグサの発生抑制を考えるために、2人の藻類の研究者をお招きしてゼミを開催しました。若菜勇氏（阿寒湖畔エコミュージアムセンターマリモ研究室）には、カワシオグサと形態が似ている「マリモの生態と保全」のお話を、鯨坂哲朗氏（京都大学大学院地球環境学学）には、カワシオグサの栄養分析の結果と海外（メコン川）におけるシオグサの発生実態を紹介していただき

ました。参加者はゼミの終わりに、鯨坂氏から振る舞われたラオス土産のシオグサノリ（板状にした加工食品：写真参照）を軽くあぶって試食しました。



シオグサノリを紹介する鯨坂先生

それは、香ばしい「のり」の風味があり、矢作川のカワシオグサでも作ってみたいという声があがりました。（内田）

4月～

今年も明治用水頭首工のアユの遡上調査を開始しています。

最初にまとまった遡上が確認されたのは4月1日で、この日は午後だけの調査で1,300尾余りが確認され、翌日も一日で約1,800尾が遡上しました。



新しい小屋の中でアユの遡上数をカウントする調査員

調査に携わっている方の経験によれば、例年と比べて10日から2週間程度も早い遡上のように、今年は順調なアユの遡上が期待されます。（山本）

04 矢作川「川会議」開催

お知らせ

開催日

平成16年5月8日（土）
「矢作川の日（5月の第2土曜日）」

開催場所

矢作川 越戸公園・古岸水辺公園

開催内容

【イベント】

- ◇子供あまご釣り大会（越戸公園）
9：00～12：00 参加費100円
- ◇矢作川水辺ウォーク（古岸水辺公園周辺）
13：00～14：30 無料

【シンポジウム】

- ◇『ゴミのない矢作川を創る』（古岸水辺公園）
15：00～17：30 無料
- 基調報告
- ディスカッション

【交流会】

- ◇交流パーティー（古岸水辺公園）
18：00～ 参加費1,000円

※受付は当日、現地をお願い致します。

皆さまの参加をお待ちしております。

釣り道具持参

編集後記

久しぶりにRioの担当に舞い戻り、忘れてしまった手順を一つ一つ思い出しながら、この5月号を編集しました。私が担当していた時はモノクロの時代で、写真を採るポイントは“色味”ではなく、“コントラスト”が重要でした。ハンミョウのような色鮮やかな昆虫写真が載せられるなんて、夢のような気がします。

（白）

豊田市矢作川研究所

〒471-0025
愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028
E-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp